２０１０／０６／２０　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　牧師

主　　題：男性に祝福をもたらすもの
聖書箇所：随所

　先月、私たちは母の日に女性の皆さんにすばらしい贈り物をしたと思っています。皆さんへの贈り物として「女性に祝福をもたらすもの」が何なのか、だれなのかということを見ました。それは男性でした。夫でした。夫が、神が求めること、神が与えている最も果たさなければいけない役割を正しく認識しそれを実践することが必要だと言いました。それは、夫がリーダーとしての働きを為すということでした。その時にお約束したように、男性の皆さん、今日は父の日です、今日は皆さんにすばらしい贈り物をしたいと思います。
　今日私たちは、女性がどのような人物であるべきなのかということを見て行きます。夫が妻の祝福となるためにどのようにならなければいけないかを前回見ましたから、今回私たちは、妻が夫の祝福となるためにはどのような人物でなければいけないかを見て行こうと思います。妻が夫の祝福の源になる、ひょっとすると妻の皆さんはこのように言われるかもしれません。「私はもう、夫が私と出会ったその日から、私は夫の祝福になっていますよ」と。確かに、そうかも知れません。実際に多くの男性は女性がいなければ非常に愚かでどうしようもない者かもしれません。けれども、今日皆さんといっしょに見たいことは、聖書が皆さん女性たちにどのような役割を与え、何のために皆さんが存在し、それを行なって行く姿がどのようなものなのかということです。皆さんが女性として生きているその目的、役割とはいったい何なのでしょう？そして、どのようにそれを実践して行くべきなのでしょう？
　確かに、今日は特に女性の皆さんに対して語ります。その中でも結婚している女性に対してこのメッセージは向けられていますが、皆さんには「私には関係ない」と思っていただきたくありません。なぜなら、このことは今日ここにいらっしゃる一人ひとりの皆さんに大いに関係のあることだからです。男性の皆さん、これから聞くメッセージに対して、どうぞそれを聞いて、皆さんの妻たちに批判的にならないでください。なぜなら、皆さんの役割は、たとえ皆さんの妻がそのような女性でなかったとしても、これから見て行く女性になって行くために導かなければいけないからです。皆さんの役割はリーダーだからです。それゆえに男性の皆さんは、女性がどのような姿であるべきかをしっかりと理解し、それを目指して妻たちを導いて行かなければいけません。だから、皆さんはしっかりと聞かなければいけないのです。また、未婚の女性の皆さん、皆さんはこのような女性になって行かなければいけません。このような女性を目指して生きて行かなければいけないのです。未婚の男性の皆さん、皆さんが求める結婚相手はこのような女性です。皆さんが探さなければいけない女性はこのような女性です。そして、もうすでに愛する夫、または、妻を天に送った皆さん、どうぞ皆さんは自分が妻として、また、夫として生きていたときの姿を思い起こしてください。そして、自らをよく吟味してください。自分がどのような妻であったのか、自分の妻がどのような女性だったのかと…。そして、そのことによって、これからその働きへと進んで行こうとする未婚の女性たちに、また、その働きの真っ只中にいる既婚の女性たちに、皆さんが信仰の先輩としてすばらしい働きかけを為し、その成長を促すことができるように、是非このことを考えていただきたいと思います。
　今朝、私が心から願っていることは、皆さんが女性の持っている最も重要な役割が何なのかをしっかり理解し、それを実践することができるようになって行くことです。余りにもたくさんのことを伝えなければなりません。と言うよりも、伝えたいと願っています。

☆妻が夫の祝福をなるために

１．女性に与えられた役割を理解すること

　先ず、妻が夫の祝福となるためには、女性に与えられている役割が何なのかを確かに分からなければいけません。最も重要な女性の働きとはいったい何なのでしょう？それを正しく理解することがなければ、それを行なって行くことは不可能であり、その役割を果たすことによって男性に祝福をもたらすことはできません。では、それはいったい何なのでしょう？
　ある人たちは、女性の最も重要な役割は「従順」と言うかも知れません。確かに、「従順」は大切です。「従順」は聖書が教えることです。妻たちは夫に従わなければいけないと聖書は教えています。ただ、確かに聖書はそのように教えるのですが、その「従順」が女性の最も重要な役割なのかと言うと、実は、そうではありません。「従順」はむしろ、神に敬虔に仕えて行くリーダーとしての働きを全うする男性に対する、最も相応しい神に喜ばれる応答なのです。「従順」は男性のリーダーシップに対する

応答なのです。確かに「従順でありなさい」と命じられています。でも、従順であるだけでは十分ではないのです。なぜなら、「従順」は役割ではなくて「応答」だからです。皆さん想像してください。男性がどれ程神に喜ばれるリーダーシップを発揮して行こうと努力したとしても、妻が不従順であったなら導くことができるでしょうか？神の前に喜ばれる応答をして行こうと、そのように願う女性は必ず、夫のリーダーシップに従順に従って行こうとします。ですから、「従順」は大事なことです。女性にとって必要なことですが、ただ、それが「役割」かというとそうではないのです。では、いったい何なのでしょう？その答えは創世記２章１８節に見出すことができます。

１）助け手である

創世記２：１８**「その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」**、この非常に短いことばであるけれど非常に重要なこの箇所には、女性の存在の目的が明確に記されています。私たちが見る一番目のポイント、女性に与えられている一番の責務、しっかり理解しなければならないその責務は「助け手」です。妻が夫の祝福となるためには「助け手」という一番の責務を理解しなければいけないのです。皆さんにこのことを詳しく説明する必要はないと思いますが、男性と女性は同等の存在です。男性も女性も両方とも神の似姿に造られました。全く差はありません。男性も女性も神から同じ責任が求められています。神を知り神を称えるということです。ですから、存在において男性と女性には一切違いがありません。全く等しい存在なのですが、聖書を見たときに明らかになることは、男性と女性には役割の違いがあるということです。神はそのようにお定めになったのです。男性には先程から言うように「導く」という役割が与えられ、女性には「助け手」としての働きが与えられているのです。

ですから、「助け手」という第一の責務を理解しなければいけないのですが、その時に女性たちは「助け手」であることをはっきりと覚えておかなければいけません。多くの時にここに問題があります。それは何かと言うと、女性たちはこの「助け手」であることに関して、時にこのような思いを持って助けているということです。「私は自分の夫が自分がなって欲しいような人物になるために助けをします。私の理想の夫になってもらうための助けをします。私が夫にして欲しいと思うことをしてもらうために私は彼を助けます。」と。皆さん、そのような思いを持ったことはありませんか？「あなたは助けていますか」と聞くと、皆さんは手を上げて「はい、助けています。夫がどうすればよいのか分からないから、私の思うような人物になってくれるように助けているのです。夫がしたいことがよく分からないから、私がして欲しいことを上手くやってもらうために私は助けています。」と。でも、もし、私たちがこのようなことをしているなら、それは助け手としての働きをしているのではなくて、むしろ、その反対です。非常に巧妙な手段をもって（と言うとことばが悪いのですが）女性たちは男性たちが自分たちが願っていることをするように導きます。

ときに、女性たちはまるでマシンガンのようにことばの嵐を投げかけることによって、男性が何も反論することができないような状態へと陥れ、彼らをまるで銃殺するかのごとく、彼らの意志を完全に閉じさせてしまって、女性たちの言うことをしなければいけないような思いに駆られるようなことがあります。もちろん、これは誇張していますが…。でも、その姿は想像出来ますね。ときに、女性はまるでアカデミー主演女優賞を受けることができるかのようなすばらしい表現力をもって、自分の嘆き悲しみを一筋の涙によって夫に伝え、その感情の余りの激しさのゆえに、夫はもうどうすることもできなくなって、妻の言わんとしていること、妻のしたいと思うことの前に屈服することがあります。このようなことが起こっているときに女性は何をしているのでしょう？女性は男性を導いているのです。なぜなら、女性のやりたいことをしようとするからです。だれの方向へと進んでいますか？女性の方向へと進んでいませんか？確かに、女性のほうが賢い場合があります。確かに、女性が言っていることのほうが正しいことかも知れません。でも、どのようにしてそれを夫に理解してもらいますか？どのように夫がそれを決めて前に進んで行こうとするのですか？皆さんはその方法を選んでいますか？それとも自分の意見に夫を従わせるための巧みな手段を講じていますか？もし、皆さんが男性を導くとするなら、このような方法を通して皆さんは、まさにアダムとエバが罪を犯した後ののろわれた状態に自らを陥れているのです。女性が男性の上に立とうとする、男性が女性を押さえつけようとする、そのような混乱と混沌の中にいる人間関係です。それは助けることではありません。では、何が夫を助けることなのでしょう？今日のメッセージでこのことが一番言いにくいことです。なぜなら、これを言うと皆さんに嫌われるのではないかと思うからです。でも、私が言うのではなくて聖書がそのように言うので私は言わなければいけないのです。

２）「助け手である」とは？

皆さん、女性が男性を助けるということ、妻が夫を助けるということは、夫がやりたいことをするこ

とができるように妻が夫を助け、夫がなりたいと思う人物になることができるように、妻は夫の助けをすることなのです。妻は自分のしたいことをさせるために夫を助けるのではありません。夫がしたいことを夫ができるように助けるのです。自分のなって欲しい人物にさせるために夫を助けるのではなくて、夫がなりたいと思う人物になるために妻は夫を助けるのです。皆さん、思い出してください。創世記１章に、神はアダムを最初に創造されアダムに責任をお与えになったことが記されています。そして、２章１８節に神はエバをアダムの働きを助けるために造られたとあります。神はアダムに対して神のみこころを教え、神は罪のないアダムがそれを求めて熱心に生きることを知っていたときに、アダムには助け手が必要だと言ったのです。そのような働きを全うするための助け手が必要だと言ったのです。それゆえに女性の皆さん、皆さんが圧倒的な形で理解しなければならないことは、皆さんは妻として女性として、男性が神の求めることを行なってゆき、神が求める人物へと変わって行くための手伝いをしなければいけないということです。それを聞くと、もしかすると「では、私は妻になんかになりたくない。」と思われる方がいるかも知れません。「そんな惨めな悲惨な状況に自分を置きたくない。自分のことなどできないのでしょう。夫の助けのためにだけするのでしょう。しかも、夫の身勝手を助けなければいけないのでしょう。」と言われるかも知れません。もし、皆さんが少しでもそのように考えるとするなら、ぜひ、この助け手としての働きをもう少し上のレベルで考えていただきたいと思います。

皆さんは助け手であることを覚えるだけでなくて、助け手であることがいかにすばらしい働きであるのかを覚えなければいけないのです。この働きは他に類を見ないものすごくすばらしい働きなのです。聖書の中にはもう一人「助け手」と呼ばれる人物がいます。いや、正確に言うなら「助け主」と呼ばれる方がいます。だれのことを言っているのかもう皆さんお分かりでしょう。イエスが十字架に架かる前の晩、イエスは弟子たちにこのような約束をされました。ヨハネ１４：２６にそのことが記されています。**「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」**と、イエスはここで聖霊が送られることを約束しています。そして、その聖霊に対して「助け主」だと言われたのです。皆さん想像してください。聖霊は「わたしはなぜこんな悲惨な劣る役割を与えられたのだろう？」と嘆いているでしょうか？三位一体の神の中で「父なる神はあのような栄光を帯びていて、子なる神はみんなに称えられているのに、わたしだけ助け主ですか？」と思っているでしょうか？聖霊はその役割が重要さにおいて余りにも低いものであるなどと考えているでしょうか？答えはすべて「ノー」です。そのようなことは絶対にないのです。事実、もし、この助け主としての聖霊の働きがないとするなら、そこには霊的な理解はありません。私たち人間には霊的な理解はないのです。私たち人間に救いはもたらされません。私たちが霊的に成長することも変化を遂げて主に似た者へと変わって行くこともあり得ないのです。助け主の働きはすばらしい働きなのです。非常に大きな大切な、これがなければならないという働きなのです。それと同じように、女性の皆さん、皆さんが助け手として働くことがなければ、男性は神に喜ばれる者へと変わって行くことは困難です。敢えて、強調して言わせていただくなら、ひょっとすると、女性が神の前に正しく助け手としての働きを果すことがなければ、男性は神に喜ばれるリーダーとして生きて行くことが不可能かも知れません。

もう一度、創造の記事をよく考えてみてください。神は六日間ですべてのものを造られ、そして、最後にアダムを造りアダムにいろいろなことを命じました。そして、アダムを見て「あぁ、彼には助け手が必要だ。」と言ったのです。確かに、いろいろな意味で交わりが必要だったのでしょう。それなら、友だちを造れば良かったのではないでしょうか？仲良く過ごすことができる人物がいれば良かったのではないでしょうか？でも、神は友だちを造ったのではなく「助け手」を与えたのです。しかも、神はその助け手を造ろうと言われた後何をされましたか？すべての動物をアダムの前に連れてきてアダムに名前を付けさせるのです。名前を付けて行くときにアダムが気付いたことは、名前を付けた被造物、生きているものすべてを見たときに「自分に相応しい助け手はいない」ということです。そこで神はエバを造られました。なぜでしょう？エバがいなかったら、アダムは神から与えられた働きを全うすることができなかったからです。神はエバが造られる前に「すべてが良い」とは言われませんでした。神はアダムが一人でそれを果たすことができるとは言われず「人が、ひとりでいるのは良くない。助け手が必要だ。」と言われたのです。

神が私たち男性に命じていることを私たちが正しく全うして行こうと思ったら、皆さん、女性の助けが必要なのです。そして、この働きは神から与えられたすばらしい働きです。皆さんは、まさに男性が神に喜ばれる者になって行くために必要な存在なのです。それゆえに、女性の皆さんは「助け手」という一番の責務を理解しなければいけません。でも、もちろん理解するだけでは十分ではありません。「私はそのことを知っています。」と言っても、それが実際に祝福をもたらすかというと、知っている

だけでは十分ではないのです。実践しなければいけないのです。

２．助け手としての実践

それゆえに、私たちが見て行く２番目のポイントは、「助け手」という一番の責務を女性の皆さんが実践しなければいけないということです。神に喜ばれる男性が形成されて行く中で、女性の皆さんは非常に大切な役割を担っています。そして、皆さんが自分たちに与えられている助け手としての働きを実践して行くとき、全うして行くときに、男性は神に喜ばれるすばらしい者へと成長して行くのです。助け手としての役割を全うしている女性は、まさにすばらしい女性だからです。そして、私たちはその完璧な姿を箴言３１章に見ることができます。これから私たちは残りの時間をかけて、箴言３１章に記されている女性を短いながらでもできるだけ詳しく見て行こうと思います。そこでこの真の助け手として立てられている女性が、どのような生き方をしている人なのか、それを皆さんといっしょに見て行きたいと思います。

ここに書かれている女性は鏡のようなものです。女性の皆さんが鏡の前に立つときに、皆さんが見ている姿がこれなのです。これでないといけないのです。そこに映っている姿と皆さん自身の姿を照らし合わせて、それが出来る限りマッチしているように皆さんは生きて行こうとしなければいけないのです。彼女のすばらしい助け手としての姿を見て行きましょう。ここには全部で六つ、すばらしい助け手としての妻の姿を見ることができます。

◎真の助け手とは？

１）すばらしい妻　　１１－１２節

この二つの箇所から、特に、妻としての特徴を三つ上げることができます。１１－１２節**「夫の心は彼女を信頼し、彼は「収益」に欠けることがない。:12 彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。」**

ａ．夫からの信頼を得ている

このような女性を妻として持っている夫は、家を空けることに不安を覚えません。どれだけ長い期間、仕事や何かの都合で家を空けることがあっても、夫の心は完全に妻の生き方、妻の家庭に対する愛や思いやり、そこでの知恵を信頼しているゆえに、一切の不安を抱かずに、自分がしなければいけないこと、自分が望んでいること、自分が求めていることに没頭することができるということを言っているのです。夫の信頼を得ているのです。なぜなら、彼女はその人生を通して自分が信頼できる人物であることを証明して来たからです。この３１章を見て行くと、このような妻がいる家庭は非常に裕福な家庭です。財産を持っていて、多くの召使いがいて、様々な事柄が行われているそのような大きな家です。けれども、夫は妻であるこの女性に完璧な信頼を持っているゆえに、一つ一つの事柄に一々気をもむことなく、すべてのことを妻に託して出て行くことができるのです。

自分がいない間に何が起こっても、妻は知恵をもってそれを解決する能力を持っていて、どんなことにも誠実に正しいことを行なうことができると夫は知っているのです。夫は確信しています。妻が為すすべてのことは夫に悲しみをもたらすことがない、夫を傷付けることではないということを。マッカーサー先生はこのように言います。「彼女は夫に対して、夫の安心が彼女の最も大きな心配事であり、夫が安心していてほしいと心から気遣っている。そして、夫の重荷こそが彼女の取り除きたいと思っている最大の事柄である。」と。彼女の人生、彼女が夫とともに過ごす人生は、夫の求めることを達成させてあげたいということに特徴付けられているのです。そのために、彼女はあらゆることを誠実に常に継続的に揺らぐことなく行なっているゆえに、夫は心から妻を信頼しているのです。

ｂ．夫の益となる

「彼は「収益」に欠けることがない。」とありますが、**「収益」**ということばは戦利品と訳すことが出来ます。戦争が終わって戦争に勝利した国が負けた国の財産を奪い取って戻って来ます。最も良いものを自国へ持ち帰ります。それと同じように、このような妻がいる家庭には、夫にとって常に益が、最高の戦利品があると言っているのです。夫が持って来る様々な給料や、財産を妻は忠実に正しく賢く管理し運用するゆえに、たとえ、夫が離れていても夫が近くにいても、いつでも､夫の元に利益が生まれていると言うのです。益をもたらすのです。それが三番目のポイントと繋がります。

ｃ．夫の最善のために常に行動する

「彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。」とあります。この真の助け手はすばらしい妻であるということは、単に、彼女が信頼されているだけでなく、夫の益となるだけでなく、この女性は夫の最善のために常に行動しているのです。いったい、どのような事柄が彼女の生活の中に起こって行くのでしょう。人生のどんな状況の中に彼女が置かれたとしても、彼女は常に夫の最善のことだけを考えて生きようとしているのです。彼女は決して、一度たりとも夫の評判を落とすことをした

いとは思わないのです。彼女は夫に対して悪いことをしたいとは夢にも思わないのです。この女性は常にどうすれば夫のためになることができるのか、夫を喜ばせることができるのか、夫が望むことをして行くことができるのかを考えるのです。彼女は決して夫の悪口を言いません。彼女は夫の悪いことを人前で口にすることがないのです。むしろ、夫の最善とは何か、そのことだけを考えるのです。真の助け手とはすばらしい妻です。

２）すばらしい主婦　　１３－１８節

すばらしい妻であるだけでなく、彼女は家庭において主婦として家庭の事柄をしっかりと治めるすばらしい人物なのです。確かに、現代において主婦、家事をするということは女性にとって余り喜ばしいことだと思われていません。ここ２０～３０年、私たち日本人も「女性が主婦であることがすばらしい」と言うことがなくなりました。けれども、聖書は真の助け手はすばらしい主婦だと言います。家庭をしっかりと治めるすばらしい働き手だと言います。そのことが１３－１８節に記されています。ここにはいくつか、彼女がいかにすばらしい主婦であるのかが記されていますが、一つずつ追って行きましょう。

ａ．喜んで働く　　１３節

１３節**「彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、喜んで自分の手でそれを仕上げる。」**、ここに記されていることは彼女が家でどんな仕事をしているのかその姿です。彼女は一生懸命働いているのです。**「彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、」**とあります。当時、デパートや洋服屋などはありませんから、服を作るには自分たちで羊毛を手に入れて、自分たちで亜麻の葉を手に入れて来て、それらを紡いで糸にすることをしなければならなかったのです。その姿がここに記されています。ここで**「手に入れて」**と訳されていることばは、実は「探して」と訳すことが出来ます。この女性は単にそこら辺に落ちている羊毛を拾って来たのでも、その辺に生えている亜麻を取って来たのではなくて、最良のものを一生懸命探して、家族に相応しいものを持って来ようというその姿を表わしています。彼女は探していたのです。

皆さん、羊毛から毛糸ができるまでのプロセスを知っていますか？亜麻の葉からどのように麻布が作られるのか？調べましたがものすごく長いのでここで説明はしません。すごく大変な作業です。特に当時は機械のない時代ですから、全部を手でやるならものすごく大変です。機械的な作業ばかりなのです。麻の葉をそれを一本の糸にして、それを撚り合わせて一片の布にして生地にして服にするという大変な作業です。普通の葉を何本も打ちたたいて、柔らかく繊維状になったならそれを紡いで糸にしてと、とても時間がかかる大変な作業です。

皆さん想像してください。皆さんが家庭の中で自分が嫌いだと思う家事、食事の準備、買い物、食器を片付けること、洗うこと、洗濯すること、洗濯物を干す、たたむ、アイロンがけ、掃除など、何でも構いませんが、皆さんが今やっていることで、これはとても大変、苦手な作業だと思うことを想像して、それを百倍してください。それが当時この彼女が行なっていた仕事なのです。彼女はそれを喜んで自分の手で仕上げるのです。彼女は喜んでそれをするのです。彼女はわがままな女性ではありませんでした。怠け者ではなかったのです。彼女は一生懸命この働きをしようとしていました。そして、そこにはつぶやきがなかったのです。皆さん、アイロンを掛けながら「自分の服ぐらい自分でアイロンを掛ければいいのに…」、洗濯物をたたみながら「どうしてこれぐらいできないの…」なんて思いませんか？夫の皆さん、誤解しないでください。手伝いましょう、両手があるのだから、家族の益のためにそれを用いなければいけない…ではありません。この女性はたとえ夫が手伝うことがなかったとしても、夫が長期間どこかに行っていたとしても、「どうして私ばかり…」と言ってつぶやくことはなかったのです。むしろ、彼女の顔にはいつも微笑みがあったのです。なぜでしょう？ひょっとすると、皆さんは彼女が洗濯が好きだから、彼女は掃除が好きだからと思うかもしれませんが、それ自体が正しいのではありません。間違いなく、羊毛から毛糸を作る作業が楽しかったとは思いません。でも、彼女は嬉しかったのです。彼女が熱心に働くとき、彼女がしっかりと自分の家庭の事柄を行なって行くときに、喜ぶ人がいることを知っていたのです。そこから益を受ける人がだれなのかを彼女はよく知っていたのです。

だから、彼女はたとえ自分のあらゆることを犠牲にしても、家族が喜ぶことならと喜んで自分のすべてをささげてこれらのことを行なったのです。このような妻がいる家庭に夫が帰って来ると、夫は常に笑顔で迎えられます。なぜなら、妻は家に帰って来た夫の喜ぶ顔がどんなものかを知っているからです。だから、一生懸命、どんな状態で家庭を保っていて、夫が帰ったときにどのような姿を見せるのかということに気を配り、そのように行なっていたのです。だから、夫が帰って来たときその喜ぶ姿を見て、子どもたちが帰って来たときにすべてが整っていることを喜ぶその姿を見て喜びをもつのです。彼女はどんな小さな事柄も熱心に喜びをもって行ないました。彼女は家族を愛していたから、夫を愛していたからです。

ｂ．熱心な主婦　　１４－１５節

１４－１５節**「彼女は商人の舟のように、遠い所から食糧を運んで来る。:15 彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、召使の女たちに用事を言いつける。」**、この当時、保存のシステムはありませんでした。冷蔵庫も冷凍庫もなかったのです。ですから、当時の食卓に並ぶものはその時期に収穫できるものだけであり、その地域で収穫できるものに限られていました。それゆえに、ひょっとすると女性たちは「仕方がない。米と漬け物だけでいいでしょう。」と言ったかも知れませんが、この女性はそうではなかったのです。１４節に**「彼女は商人の舟のように、遠い所から食糧を運んで来る。」**とありますが、ここにはこの女性がそのような状況の中でも常に食卓に家族が喜ぶ食事がのるように、バラエティ豊かにそろえて家族を喜ばせようとするその姿を見ることができます。つまり、彼女はいろいろなことをしっかりと計画し、どの時期にどこへ行けば何を得ることができるのかを調べ、そこまで旅をすることを苦にせずに地域中を歩き回って家族の最善となるものを手に入れて家に帰って来るのです。まるで遠い国の商人のように、遠くからすばらしい食糧を運んで来るのです。

また、**「彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、」**とあります。当時の家庭は夜中ランプがついていました。そのランプの火を消さないためにはだれかが起きて油を足さなければいけない訳ですが、彼女はきっと夜中に起きてその油を足した後、もう一度ベッドに戻るのではなくて、朝の働きを始めるのです。家族の食事を整えるのです。皆さん、どうぞこの時代を思い浮かべてください。作り置きの食事があったわけではないから、彼女は朝起きて麦を引いたのでしょう。それを粉にしてパン生地にし発酵させて焼いたのでしょう。彼女はそれ以外のあらゆる食事を家族のために、家にいるすべての者のために準備をしたのでしょう。昼間、暑い時間にそれをするのは大変だから、朝早く起きて、家族の者が寝静まっている間に、家族の幸せのために家族の最善のために労力を尽くしたのです。熱心です。そして、彼女は自分の家にいる召使いたちにその日の用を告げ、彼女たちがしっかりと家庭を守り家事が出来るように管理していたのです。

ｃ．知恵がある　　１６節

１６節**「彼女は畑をよく調べて、それを手に入れ、自分がかせいで、ぶどう畑を作り、」**、興味深い記事です。彼女はここで土地の売買をし農業を営むのです。不思議なことは、ここには彼女が夫に相談している姿が一切出て来ないことです。思い出してください。夫は彼女を心から完全に信頼していたのです。彼女は夫にこれを買っても良いですかとは聞きません。多分、購入に当たっての代金は家計から出たものではなかったのでしょう。この後見ますが、彼女はビジネスを持っていました。彼女はきっとそのお金を貯めていたのでしょう。夫に聞く必要のないお金だったのでしょう。夫は彼女を心から信頼していたゆえに、その知恵に信頼し、その知識を信頼し、その願い思いを信頼していたゆえに、彼女は自分で土地を調べ、その土地が良いのを見て購入し、家族がより幸せにより豊かになるために、そこにぶどう畑を作って新たな収入源としたのです。すばらしい女性ですね。彼女は自分のためにそのようにしたのではありません。自分がもっと利益を得るため、自分が良いものを着たいから、もっと良いことをしたいからではありません。彼女は家族のことを思ってそれをしたのです。

ｄ．力がある　　１７節

１７節**「腰に帯を強く引き締め、勇ましく腕をふるう。」**、彼女は勇ましかったのです。想像してください。彼女は朝早くから起きて重い石臼を引いていたのです。それだけでありません。毎日暑い中、いろいろな食材を買いに、また、羊毛や亜麻を得るためにいろいろな所を旅して回ったのです。そして、購入した重い食材を持って、長い距離を歩いて自分の家に帰ったのです。また、土地を調べてぶどう畑を作ってそこで労力をふるったのです。**「腰に帯を強く引き締め、」**とは、大変な仕事をするときの様子です。彼女はそのことを喜んで為し、その働きができるほど勇ましい力強い女性だったのです。肉体的な力だけではありません。精神的な強さ、道徳的な強さ、また、霊的な強さも見て取ることができるでしょう。喜んで働き、熱心で知恵があり力ある主婦、そして、

ｅ．満足している　　１８節

１８節**「彼女は収入がよいのを味わい、そのともしびは夜になっても消えない。」**と記されています。彼女がすべてのことを喜びをもって行なうことができるのは、彼女が為すあらゆることが家族の最善のためになると知っているからですが、同時に、それは彼女に大きな満足をもたらしたのです。彼女が一生懸命努力すればするほど、彼女の愛する人たちはより幸いな状況へと置かれて行くからです。彼らの最善が為されているのです。マッカーサー先生はこの女性についてこのように言います。「彼女は彼女の周りにいる彼女の愛するすべての人たちに最善が行なわれることのすばらしさのゆえに、すべてのことを行なっている。それに動機づけられている。彼女をこのような働きに駆り立てたのは、自分の自己満足のためでもなく、また、自分のわがままを行ないたいゆえのためでもなかった。これらの働きに駆り立

てたのは、それは彼女が家族のために彼女の周りにいる人たちのために為す良いことが、いかにすばらしいのかをよく分かっていたから。」と。

「収入がよいのを味わって」満足するだけでなく、１８節の最後には**「そのともしびは夜になっても消えない。」**とあります。もしかすると、これは人々が寝静まった後もいつまでもランプが灯っていて、彼女が夜な夜な仕事をしている姿を表わしているのかも知れません。そうならこれは彼女の熱心さを教えるものですが、３１篇に記されている詩の特徴を考えたときに、ここでは彼女の満足さを表わしていると私は考えます。この「ともしび」は夜中ついていたのですが、それはその家庭が良い状態に置かれていることの証だったのです。「何も欠けた所がない、大丈夫です。」と言っているのです。このような使われ方はエレミヤ２５：１０やヨブ１８：６にも見ることができます。**「わたしは彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともしびの光を消し去る。」「彼の天幕のうちでは、光は暗くなり、彼を照らすともしびも消える。」**と。つまり、彼女はこの家の状態を見て、決してともしびが消えることがないほど良い状態であることを知って満足を得ていたのです。充足していたのです。彼女に欠けた所はなかったのです。皆さん、この女性、真の助け手はすばらしい主婦なのです。

３）すばらしい心配り　　１９－２１節

「世話をする人」と言ってもいいでしょう。そのことが１９－２１節に記されています。この「心を配る」ということに関して、この箴言の中では二種類の人たちに言及しています。一つは「隣人」でもう一つは「家族」です。これまでの記事を見ると、彼女は常に自分の家族のことだけを考えていると思われるかもしれませんが、実は、彼女はそのような利己的な人物ではなかったのです。彼女は周りの人たちにしっかりと目を向けて、周りの人たちを養おう、周りの人たちの徳を高めようと生きている人物だったのです。そのことが１９－２０節に記されています。**「彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、手に糸巻きをつかむ。:20 彼女は悩んでいる人に手を差し出し、貧しい者に手を差し伸べる。」**、分かりにくいかもしれませんが、実は、この二つの節はいっしょに捉えるべきです。なぜなら、原文を見ると、ここで使われていることばは余りにも類似しているからです。偶然に起こっているのではなくて意図的なのです。つまり、**「彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、」**とは彼女が副職を営んで生計を立てようとしているその時に、**「糸取り棒に手を差し伸べ」**ているのは、貧しい者に手を差し伸べるのと同じことだと言っているのです。つまり、この働きは貧しい者のためにもされていたのです。また、**「手に糸巻きをつかむ」**のは彼女が悩んでいる人に手を差し出して悩んでいる人たちの手をつかむために為しているということです。つまり、彼女は自分の家族のことだけを考えたのではないのです。彼女は周りに困っている人たちがいるなら、周りに疲れている人たちがいるなら、周りに必要を覚えている人たちがいるなら、その人たちのために、自分の労力を惜しむことなく分け与えたのです。心配りの人です。彼女は周りの困っている人たちを無視することができなかったのです。

また、これは明らかに家族にも向けられています。２１節には**「彼女は家の者のために雪を恐れない。家の者はみな、あわせの着物を着ているからだ。」**。エルサレムにも雪が降ります。毎年ではありませんが、冬には厳しい寒さが訪れます。それゆえに、冬にどのような着物を着ているのかは大事なことです。今よりも家の中での生活は大変だったでしょう。この当時、家の中を暖めることができた唯一の暖房器具は小さなお皿に盛られていた炭だけだったのです。家の中ではカーテンのようなものが敷き詰められて、できるだけ部屋を小さく区切って、小さな炭のその暖だけで何とか暖かさを保とうとしました。それゆえに、当時の人たちは外に出るときだけコートを着たのではなくて、家の中でもひょっとすると寝るときもこのような厚手の着物を着なければいけなかったのです。でも、彼女は冬が来ることを恐れませんでした。準備ができていたからです。

彼女は家族が最善最高の状態で暮らすことができるように常に気を配っていたゆえに、雪の日を恐れることもなかったのです。ちなみに、この「あわせの着物」に注釈が付いていて、欄外に「緋の衣」とあります。赤い衣です。どちらが正しいのか分かりにくいのですが、間違いなくここで言っていることは羊毛のことです。羊毛が二重になっているとあわせの着物になります。ヘブル語をギリシャ語に訳した７０人訳の聖書では、このように「あわせの着物」と訳しているのですが、ヘブライ語の聖書を見るとそこでは「緋の衣」とあります。皆さん、不思議に思いませんか？羊毛で作った暖かい着物は何色でしょう？白です。でも、赤い着物を着ているのです。もし、これが正しい読み方であるなら、ここで言われていることは、彼女がいかに家族の服装にも気遣っていたのかを表わしていたのではないかと思います。暖かさを少しでも保つためには暖かい色、濃い色の着物を着た方が良いではないですか？

それだけでなく、赤は非常に周りに映える色です。人々がそれを着ているとファッションのセンスを感じます。彼女はそのようにして家族に心配り気遣いをしたのです。真の助け手は「心配りの人」です。

４）すばらしい女性　　２２－２６節

１０節にそのことばが記されていますが後で見ます。この女性はすばらしいしっかりとした女性です。どのようにすばらしかったのか、そのことが２２節から２６節までに記されています。最初に２２節、**「彼女は自分のための敷き物を作り、彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。」**、確かに、ここでは「敷き物」と訳されていますが、この「敷き物」ということばは、実は、コート、上着、ショールと着る物として訳すことが出来ます。多分、その方が正しいと思います。なぜなら、ヘブライ語の詩では２行を１束として考えることが常だからです。後半部分は明らかに着物のことを言っています。だから、前半部分も着物のことと考える方が正しいだろうと思うのです。

つまり、彼女は家族のために着物を作っていただけではなくて、商売をするために着物を作っていたのでもなく、また、困っている人たちのために着物を作っていたのでもなく、自分のためにも着物を作ったのです。ここからが興味深いところです。**「彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。」**のです。このすばらしい女性は自分の外面的美しさにも配慮をしているのです。ここで**「亜麻布」**と訳されていますが、これは単なる亜麻の衣ではありません。麻の服ではないのです。ヨセフがエジプトでパロに認められてパロの次の地位を取ったときに、そのときにパロがヨセフに着せた服がこのことばです。みすぼらしい亜麻の服ではありません。このことばは非常に古い単語が使われていて、これと同等の新しいことば、後の時代になって頻繁に使われるようになったことばは同じ意味を持っていると言われるのですが、それはダビデが着ていた衣であるとか、そのような高い地位に就いていた人たちが着ていたすばらしい着物なのです。

しかも、その高級な亜麻の衣は紫色をしているのです。紫色の特徴は王たちや金持ちたちが好んだ色なのです。なぜなら、この色は気品を示し気高さを強調する色だったからです。この当時、紫色に染色できるものは一つしかありませんでした。それは地中海で取ることができる小さな貝殻からわずかな量だけ摂取することができる染料だったのです。皆さん、この頃は養殖などできなかったのです。それゆえに、漁師たちは長い時間をかけて高いお金をかけて、これだけの着物を染めるための染料を得るためにたくさんの貝を集めて、それをしっかりと処理して染料を作って着物を染めなければいけなかったのです。だから、高価で尊く気品のあるすばらしい物として王たちや金持ちたちが好んで着ていたのです。なぜ、この女性が着ているのでしょう？もちろん、お金があったからでしょう。確かに、この箇所は王となる男性に対してその母がこのような女性を選びなさいと言っているところです。でも、単にお金があったからお金に物を言わせてこれらを買ったのではありません。自分で探して自分の手で作ったのです。なぜなら、彼女は神が与えてくださっている外面的な美しさを、夫のために保つということを心がけていたからです。女性の皆さん、皆さんは神によって､外面的に美しく作られているのです。ご主人のためだけに自らを美しく備えたのはいつが最後ですか？皆さんが一番美しさを表わす相手は夫です。夫のために美しさを示そうとしなければいけないのです。

彼女は喜んでそれをしたのです。なぜなら、自分の美しい姿を夫が見るのを喜ぶことを知っていたからです。だから、彼女はできる限り美しさを表わすものを身につけようと努めたのです。皆さんがこの後、高島屋に駆け込むのを避けるためにもう一つ大切なことを覚えていただかなければいけません。それは内側に何を身につけるかです。そのことが２５節に書かれています。**「彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。」**、彼女が気遣っていたのは外側の美しさだけではないのです。むしろ、彼女が気遣っていたのは内側の美しさです。**「力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。」**、彼女は喜んで未来を迎えました。なぜなら、彼女には信仰があったからです。為さなければならないあらゆることを全うしたという確信のもとに、彼女は「後は神さまの働きがあるから」と言って、喜んで先のことに期待を抱きながら毎日を生活していたのです。皆さんはどうですか？自分の身につけるものに気を配っていますか？どんな宝石を身につけてどのような化粧をしてどんな服を着るのか？と。でも、彼女が心配していたことは、それ以上に、内側にどのような衣を身につけるかということでした。彼女があらゆることをして主に信頼して未来を迎えることができるという思いを持っていたゆえに、この女性ほど美しい人はいませんでした。心配のない時の表情は美しいと思いませんか？何も問題がないと分かっているときの表情は生き生きとしていませんか？

彼女はそのような表情を常に持って生きていたのです。なんと美しい女性でしょう。その女性が単に内側だけでなくて外側にも気を遣っていたのです。皆さん考えてください。この女性はずっと大変な仕事をしていました。昼間は遠くまで歩いて行って重い荷物を持って帰って来る。他に農作業などいろいろな働きをして、夜も寝ないでいたのです。ひょっとすると、目の下に隈を作って二の腕は凄く太くて、足もどんと太いような女性を想像するかも知れませんが、この女性はだれよりも美しかったのです。特に、彼女の夫に対して。彼女の夫は彼女が一番美しいと思っていたのです。すばらしい女性です。外面的な美しさに配慮があり、内面的な美しさに配慮があり、そして、自分の評価への配慮があります。

２３－２４節にそのことが記されています。**「夫は町囲みのうちで人々によく知られ、土地の長老たちとともに座に着く。:24 彼女は亜麻布の着物を作って、売り、帯を作って、商人に渡す。」**。２４節には彼女の仕事に関することが書かれています。遠くから商人が彼女が作っている商品を買い取りに来るのです。彼女はそれがしっかりと評価される物であるように気を配りながらすべてのことを為していました。でも、それだけでなく、２３節では夫が町の中で一番偉い人になっていると言っています。長老たちといっしょにいて治めている人物です。不思議だと思いませんか？これまで妻のことを話していたのに、突然夫のことが出て来るからです。なぜでしょう？もちろん、最初に話したように、夫は妻を信頼しているから妻が家庭をしっかり治めているから、自分のやりたいことを全うできるように、そのことに集中することができます。でも、それだけではなく、なぜ、このように町囲みの中で長老たちといっしょに高い地位に着くことができるのかと言えば、このようなすばらしい家庭を持っていて、このようなすばらしい妻を治めている男性はすばらしい人物に違いないという認識を、周りの人たちがみんな持っていたからです。だから、これは妻の話をしているのです。どうですか妻である皆さん、自分がすばらしい妻であるから、周りの人たちは皆さんのご主人はすばらしい人物だと思っているでしょうか？この女性はそんな女性だったのです。

そして、ことばに配慮がありました。２６節**「彼女は口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みのおしえがある。」**、彼女の語ることばは知恵に満ち、彼女の語ることばは主の教えに満ちていたのです。舌をコントロールすることは難しいではないですか？でも、この女性はそれを見事にしていたのです。軽率なことばを語るのではなく、人を傷付けることばを好んで口にするのではなく、彼女のことばには知恵があったのです。

５）すばらしい母　　２７－２９節

真の助け手はすばらしい主婦であり、すばらしい妻であり、心配りがあり、すばらしい女性であり、すばらしい母です。２７節**「彼女は家族の様子をよく見張り、怠惰のパンを食べない。」**、この母親は家の様子をよく観察していて、家族に何か間違ったことがないか、間違った習慣を身につけていないかを注意深く見ているのです。そして、それが見えるなら知恵深く語り恵みの教えをして、彼らを正し彼らを正しい方向へと導きます。彼らが正しいことを行なっているなら、それを褒め励ますのです。彼女は怠けていませんでした。いつも仕事をしていたし、仕事を休んで椅子に座っているときも、彼女は家族の様子をしっかりと観察していたのです。

だから、子どもたちも夫も言います。２８－２９節**「その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言い、夫も彼女をほめたたえて言う。:29 「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまさっている。」と。」**、単に、個人の家庭の中ではなくて、ここでは明らかに公の場が想像される表現です。つまり、例えば、教会の中で子どもたちが立って「私の母親はこんなにすばらしい母親です。」と宣言するのです。そして、夫も言うのです。「この女性ほどすばらしい女性はいない。」と。結婚した当初はお互いに惹かれるものがあるでしょう。でも、時間の経過とともに惹かれているお互いの魅力が薄れて行くというのが私たち人間の現実かも知れません。でも、女性の皆さん、皆さんがふさわしい助け手となって行くときに、男性は皆さんといっしょにいたくてしようがないと歳を重ねる毎に思うのです。今、どれだけの家庭が、どれだけの夫がそのように言うでしょうか？「あぁ、今日は夫の顔を見なくよかった。いっしょにいるのがしんどいのです。」などとは言いません。歳を重ねるほど、何とすばらしい女性であるかが分かるのです。

６）すばらしい信仰者　　３０－３１節

３０節**「麗しさはいつわり。美しさはむなしい。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」**、外面的な姿形、それが麗しさということばに表わされています。そして、美しさは顔立ちのことです。それらがいかにむなしいかと言います。パッケージが美しくても内側が汚れているならどうしようもないのです。でも、主を恐れ、神を信じ神を信頼する女性はすばらしい女性です。皆さん、このような女性になることは難しいと思われるかもしれません。でも、第一歩はまさにここから始まるのです。皆さんがいかに主を信頼し主を恐れて主が望む者へとなって行こうとするかです。３１節**「彼女の手でかせいだ実を彼女に与え、彼女のしたことを町囲みのうちでほめたたえよ。」**、彼女は家族だけでなく**「町囲みのうちで」**ほめたたえられます。

大急ぎで見て来ました。私たちは今日もこの３１章に書かれている女性を「何とすばらしい女性だ」と言って誉め称えました。聖書は１０節でこのように言っています。**「しっかりした妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。」**、皆さん、ご存じですか？箴言の中で**「真珠よりもはるかに尊い。」**と言われているところが一つだけあります。この女性以外に一つだけあるのです。それは何と「知恵」です。何とすばらしい女性であるかが分かります。神さまは言われます。「真珠よ

りもすぐれたものは知恵とこの女性だ。」と。
　皆さん、「私はこんな女性にはなれません。これは理想でしょう？」と言わないでください。なぜなら、実は、この箴言３１章の１０節から３１節は、先程から話しているように詩の形をしているのですが、それは１０節から順番にヘブライ語のアルファベットが順に２２番目まで続いているのです。一番初めのことばがヘブライ語のアルファベットのＡならＡ、ＢならＢと１節ずつ続いて行く訳です。なぜこのような方法を使っているのかというと、皆がそれを覚えて黙祷して、このような女性になるために自らを鍛錬して行こうとすることが目的とされているからです。皆さん、このような女性になりたくないですか？
　男性の皆さん、このような妻を求めましょう。このような妻へと女性を育んで行きましょう。女性の皆さん、こんな女性になってください。そのときに皆さんの家庭は、皆さんの愛する人たちは、そして、皆さんの神は永遠に皆さんに働いてくださいます。